



産学官の道路インフラ関係者にとって日本最大の会議となる日本道路会議は、道路の計画・建設・維持管理・マネジメントまで幅広い情報交換の場となる。約2000人が一堂に会する貴重な会議となるだけに、日本道路協会の谷口博昭会長は「『現場』をもっと価値や創造を生み出す場にするために生きた情報交換が必要だ。インターネットなど情報伝達手段が高度に発達したからこそフェース・トゥ・フェースが肝要になる。将来を担う若者にも積極的に参加してもらいたい」と意気込む。

32回目を迎えた今回は、基調

## 日本道路協会 谷口 博昭会長に聞く

講演でビッグデータの活用、「先進事例と最新情報の共有と意見交換」のセッションで地域活動団体、巨大地震、無電柱化、自動運転の5テーマ、「先進的な取り組み・研究成果の発表や海外事情など最新情報の提供」のセッションでアセットマネジメントと途上国における道路プロジェクトの2テーマを取り上

題について産学官の道路関係者がフェース・トゥ・フェースでコミュニケーションを深めることができるこの会議はもっと有効に活用されるべき。『3人寄れば文殊の知恵』という言葉のように、互いに刺激し合い新たな発見や進化につながる場にした」と抱負を語る。

ことしは日本道路協会が創立

とともに、ソフトとハードのバランスのとれた施策が重要だ」と今後の方向性を語る。

それには「歴史作家の塩野七生氏の『古代ローマ帝国のアッピア街道や上下水道は需要を見込めるから整備されたのではなく需要を喚起するために行った』という指摘がヒントになる」と考える。言い換えるなら、

上下水道を完備させた。そうしたインフラ整備は領内の産業、生活などに新たな需要を喚起する上でも重要な施策であり、「先を見る政治的観点でなければなしえないものだ」と考える。そしていまの日本が安定的・持続的に道路の財源を確保するには、「目先の需要追従型から脱却し、需要創造型・インフラ投資型への道路行政に移行する必要がある」と強調する。

## 会議を「真剣勝負」の場に

げる。一般論文発表は3部門で計445の口頭発表と意見交換、57のポスター発表を行う。

今日の道路インフラをとりまく課題や新技術のトレンドなどを網羅するとともに、新たに優秀論文賞と奨励賞の表彰式を2日間のそれぞれ夕刻に行うことで会議を盛り上げる。「ピーク時は5200人いた参加者がいまは2200人程度。多様な問

70周年を迎えた節目でもある。「人間でいえば古希に当たる。『継往開来』という言葉があるように、先人の事業を受け継ぎ、未来を切り拓く精神で協会の運営に当たりたい」と前を向く。

道路は最も基礎的で基本的なインフラであるがゆえに「暮らしや産業の発展に応じた整備、保全が求められる。ITなど新技術を駆使してストックを生かす

「公共事業には当初の需要を度外視してもやらなければならぬものがあり、それは政治的判断に基づくインフラ整備といえる。逆に需要の見込みが立たない限り事業をやらな」というのは経済的論理だ」と指摘する。

ローマ帝国は、ヨーロッパ、中東、北アフリカまで広大な領土を築き、各州に道路網を張り巡らせ、中小の町にいたるまで

今回の日本道路会議でも「生きた行政にするのは理屈だけではなくムードを盛り上げることが重要だ。それには道路関係者の交流をより活性化させる必要があるだろう。この会議はこなすのではなく、真剣勝負の場にするので少しでも前に進むことができる。そうすることで将来を担う若い世代に道路インフラを託していきたい」と力を込める。